

## 【京都新聞賞】

「『受け継ぐ』という使命」

舞鶴市立加佐中学校 3年

千原 朋也



僕が住んでいる地域には、秋にお祭りがあり、その時、「地頭太鼓」という太鼓がたたかれています。「地頭太鼓」は、大江山の酒呑童子伝説と深いかわりがある太鼓です。

昔、大江山に鬼が住み着き、付近の村で、大暴れしていました。そこで朝廷から源頼光らが鬼退治を命じられました。鬼退治に行く際に、戦勝を祈願してたたかれたのが地頭太鼓の始まりと言われています。戦勝祈願のため、バチは、上へ上へとたたくのが特徴です。「地頭太鼓」は昔から地域で協力し、現在まで受け継がれてきました。昭和40年には舞鶴市無形文化財に登録されています。

しかし、今は地頭太鼓をたたく子どもが少なくなり、高齢化も進んでいます。このまま地域の少子高齢化が進めば、祭りの継続が難しくなります。また、「地頭太鼓」の伝統が途絶える可能性も高いです。ほかの地域でも同じようなことが起きているのではないのでしょうか。現実に行われてきた行事で、なくなったものもあり、「地頭太鼓」が途絶える可能性も、遠い未来ではないように思います。

人から人へ伝え、「受け継ぐ」ことの危機が迫っているのは、地域の祭りだけではなく、戦争や核兵器の脅威についても同じようなことが言えます。

僕は、修学旅行で長崎へ行きました。皆さんは長崎といえば、何を思い浮かべるでしょうか。長崎は、人類が歴史上、最後に使った原子爆弾が、落とされたところです。原爆によって、爆風・熱線・放射能が人々を襲い、何万人の死者を出したところです。そんな原爆によって被害を受けながらも、一命をとりとめ、生きてこられた方々がおられます。しかし、終戦から70年が過ぎ、被爆者の方々も高齢化しているのが現状です。

長崎の修学旅行では、被爆者の方から「被爆体験」を聞く機会がありました。僕たちに講話してくださった方は、4歳で被爆し、両手両足に大やけどを負われたそうです。後遺症に苦しみ、今も不自由な生活をされておられます。また、壮絶ないじめや差別を受けていたことも知りました。被爆された方々は、あの日以来、僕たちの想像以上に苦しみ、つらい生活を送って来られました。被爆者にしかわからない辛い思い、そして強い平和への願いがあることを感じました。その思いを後世に伝え、残すために被爆体験を話されているのでした。僕たちは、被爆者の思いを真摯に受け止め、考え、伝えていかなければいけないと思いました。

しかし、僕たちの世代は、戦争を体験しておらず、戦争について知らないことが多いです。また、知ろうともしない人もたくさんいます。僕も、修学旅行で戦争や原子爆弾について学んだとはいえ、まだまだ十分に理解できているとは言えません。悲劇を繰り返さないために、もっと歴史を知り、過去に学ぶことが大切だと思います。

地域の祭りも同じです。今まで僕は、何気なく祭りに参加していました。参加するだけでいいと思っていました。しかし、最近になり、祭りに参加する人や、太鼓をたたく子どもが少なくなってきた、これからどうなるのだろう…と思うようになりました。その思いが、祭りや「地頭太鼓」の歴史を知ろうとするきっかけとなりました。歴史を知ることによって、祭りに参加し、「地頭太鼓」をたたくことに対する意識が変わりました。今まで受け継がれてきた伝統を守らなければいけない、と強く感じるようになりました。

「地頭太鼓」を伝えてきた地域の人たちや、自分のつらい被爆体験を語ってくださった被爆者の方は、「後世に伝えたい」という気持ちで、伝えてくださってきたのです。そんな思いを僕たちは受け継ぐ責任があると思います。「受け継ぐ」ということは難しいことではあります。しかし、先人がしてこられたことを知り、歴史を学び、思いを感じる力が力になるのではないのでしょうか。

太鼓をたたくのも、被爆体験を伝えるのも人の思いです。その思いを受け止め、後世に伝えていくことがある意味、僕たち世代の使命のようにも感じます。

僕は、世の中で起きている様々なことに興味を持ち、伝統や人の思いを受け継ぎ、後世に大切なことを伝えていく一人になりたいと思います。